

# 幼稚園の課程について

東京府立女子師範學校主事 木 下 一 雄

三三

現代の教育思潮一般よりするも、幼稚園の課程は幼児をして出來得る限り、その本質的生活々動に適合せしめ得るやうに計畫されなければならぬ。即ち幼稚園教育の主眼は、幼児の興味、要求暗示等に従つて、生活の内容を豊富にする所に存するのである。その課程は無論靜的のものであつてはならない。それらの興味要求等は幼児の型と年齢とによつて様々である。また家庭その他の環境によつて異なつて來るのである。而してまたその課程は常に社會の進歩と一致することを要する。こゝに於て教師は子供の要求する所に合致する様に課程を組織し、子供の生活に價値ある活動

をなさしむる事が肝要である。課程の主要なる材料は、子供の關係する日々の生活經驗から取られるのである。子供の眞の生活狀態に即した活動こそ、そのオリヂナリテーを發揮せしめることが出来るのである。それらの活動はカードを切つたり幾何的形態のものを取扱はせるより、どれだけ教育的價値を持つて居るであらう。

自由と活動とを許すことによつて、幼稚園は子供に社會的協同生活を體驗させ、また個人の責任感を養ふことが出来るのである。幼稚園に入つた子供は友達と一緒に遊ばなければならぬ。彼等は自分達の行爲に責任を持ち、義務を感じ、同時

に自分達の要求によつて學び得る様に許されねばならぬ。教師の指導の下にかくの如き方法によつて子供の經驗が發展されて行くのである。

幼兒が幼稚園を了つて尋常一年に入學するのは別人となつて行くのではない。同じ能力と同じ興味と同じ活動力とを以て行くのである。そこには幼稚園の幼兒として支配された教育と同じ原理が作用するのである。自己表現、創造力、判斷、觀察、思考の能力は、幼稚園から尋常一年に持つて行かれる。而してそれらのものを備へた子供は、更に續けて讀むこと、書くこと、數へることの仕事に取懸るのである。新しい課題に對するそれらの子供の態度は、正しい方向に正しい順序で發展したものであつて、その進歩は非常に早いであらう。

幼稚園は讀んだり書いたり數へたりすることに於て、形式的な作業を課するものではない。併し

乍ら子供は屢その遊戲生活の要求からして、それらの知識を得て居るのである。幼兒は毎日の生活經驗を通して、數を取扱つて居る。辨當の時に使用するナブキンを數へたり、作業をする時に必要な腰掛を數へなければならぬ。十四人居る所に、十三だけ腰掛がある時は、もう一つ腰掛を持つて來るのである。また本を讀むといふことは教へられないのであるが、先生が本文を讀み、子供がその繪を見るといふことが繰返されるならば、それで讀むことの基礎は出來るのである。以下各項について少しく述べる事とする。

音楽は幼稚園及び尋常一年の子供の大切な教育要素である。それはリズムミツクに或はメロヂツクに考へることの感覺を刺戟し、幼き子供の時代にも、調和といふ事の美的の喜びや、藝術心を發展させることが出來るのである。よい歌曲によつて子供の心に美しい音楽の經驗を廣めることは不可

能ではない。リズムはまた自己表現の手段であつて、無意識的に、機械的に、たと手を拍つ如き連續を意味するものではない。幼児自身の方法によつて、自由に自發的に、しかも全身的になされる表現であると見るべきである。

次に幼児の活動及び經驗に關係ある談話や童謡によつて觀賞へ導くことも價值ある事である。幼兒に對する話は單純で筋が通り、主人公の性格が明瞭に描き出されて居るがよい。談話の種類は子供の經驗及び活動から生れたもので、たとひ教訓を目的とする話も、子供の生活から生れたものでなくば、何等子供の問題とはなり得ないものである。話さるべき談話の數は幼兒の發達の程度に應ずるものであつて、新しい話は一ヶ月一つ位でよく、餘り多くの話をする事は、却つて子供の心を混雜させ、その價值を失はしめることになる。而して談話は子供がそれと十分に親しみ合ひ、自

分で話の出来る様に繰返される程がよい。話は述べ懐的でなく、具體的にあらはれる事を要する。幼兒にはまた一方に自ら話すことをさせなければならぬ。自ら話すことは、思想を言葉で發表する能力を増し、自らの語彙を多くすることにもなる。

幼兒はかくして尋常一年に進む準備をするのである。幼兒は度々自分を表現する機會を與へられると、たとひ貧弱ながらも喜んで話をするやうになる。子供をして自由に話さしめ、聞いたり答へさせたりすることは、子供の經驗を廣めることになり、子供の語彙を増し、明瞭な話方、正しき發音美はしき調子、一と通りの作法等をもこの間に養へることが出来るのである。

談話も亦一定の時間にするのでなく、毎日の仕事の中に折込まれる様にすることを要する。子供をして自分を發表するに自由を感せしめ、何か問題の起つた時に考へを述べ得るやうにすることが

大切である。その話す場合には、正しい言葉の形式を用ひさせ、不正な、語法にかなはぬやうな表現の習慣を矯め、先生は次にそれに代へるに正しい形式を以てする事が何よりである。

表現せんとする子供の希求は、むしろ幼稚の本性であるとするべきである。幼稚園はこれらの希求を紙とクレヨンと粘土とを興へて、自由に満足させてやらなければならぬ。かくして創造的の想像が發達させられるのである。その際の發表は技術が主眼ではない。幼稚園にあつては子供の活動から出來上つたものに價値があるのである。幼兒は觀念から繪を描くので、外にあるものを描くのではない。また子供は思つて居る所を書くので、見た所を描くのではない。木を描く時には、地面の中の根までを描き、靴を描くならば、靴の中の足までも描いて仕舞ふ。その束縛されない發表の中に、自發的な發表のオリジナリティーや新鮮さ

がある。

自然研究は幼兒の遊戯生活の中に密接に關係あるものを材料とするのである。子供は自然について新しい經驗を持つことを喜ぶ。彼等は野生の花を集め、木に登り、蝶を追ひ、落葉で遊ぶ。雨の後で水の中を渡り歩き、木の實を集め、犬や猫と戯れる。自然に對する愛好は幼稚園の中まで搬ばれて行かなければならぬ。それ等のものはよき遊び材料であつたり、美しいものであつたりする故に、幼稚園教育の材料となるのである。子供が花で鎖を作つたり、落葉で遊んだりする中に、更に多くの問題を持つたならば、要求するだけの知識を興へられる。同じ様にして鳥の事も考へられる。鳥が巢を作るのを見たり、水を飲みに来たり、水に體を洗ふのを見る。子供はかくして四季の變化に興味を持つ。朝夕、雨の日雪の日を觀察する。子供はそれらを歌により繪によつて自分の感情を

發表する。

次に幼児は數限りなき社會環境の接觸物を通して、一緒に生活するものとの間に、「取り且與へる」ことを學ぶのである。子供はそれらの生活の間に、社會に於ける責任ある一員であることに適合せしめられる。環境に一致した生活をなさしめ環境に興味を持ち、これを理解するやうに導くことが大切である。

最後に「觀察」といふことを一つの課程と見てそのものだけを切り離して考へて見たいと思ふ。前述の如く、幼児が幼稚園から小學校に行き、更に上の學校まで行くのに、別人となつて行くのではない。従て觀察の如きも、程度によつて別の意味の觀察がある譯でなく、觀察の純理は一貫して居り、たゞこれを幼稚園に於て行ふ時に、特殊な具體的な方法が要求せられるのである。觀察の理論を知らないで直ちに實際に望むことは、當るこ

ともあり、或は全く外れて居ることもある。こゝには簡單に理論のみを述べることにする。

觀察は事實を忠實に經驗することである。觀察の際には、それが自然事象であつても社會事象であつても、常に出來得る限り自分のために働かせらるやうにして、その結果を觀察することが大切である。従つて觀察は事實をたゞ受動的に受取るといふのではなく、寧ろ構成的な要素が多いのである。忠實に經驗し、創造的に構成することが、觀察の眞義である。即ち我々はたゞ經驗するといふのではなく、「どうなるか」「どう見えるか」といふやうな態度を要求するのである。これがやがて上級の學校に行つた場合の思考作用の基礎となるのである。およそ或る事柄の經驗は、幼児の場合でも無意識に概括が行はれて居る譯で、觀察と概括とは必ず相繼續するものである。「日蔭にある草花の色は鮮かでない」「雨が多かつたので果物に蟲が多

い」といふ様な判断は、方法的に取扱つた科學よりも無論出て來るものであるが、幼稚園の庭でも必ず生じる概括であらう。

然らば觀察の指導を如何にするか。觀察の第一の仕事は數へ上ること、分類する事である。

(Enumeration and Division) これは石を拾つたり木の葉を蒐めたり、蝶を取つたりして、同種のものの異種のもの等に分類するのである。幼兒のこの仕事の範圍はかなり廣く行はれるものである。第二は統計的(Statistics)の作業をすることである。

自然または社會の現象相互の間に分量的に對應を考へ、現象の一致の存すること、即ち語を換へて云ふならば因果關係を試みることである。毎日の天候の模様を晴、雨、曇の三様にして、赤玉、白王、赤白玉にこれを配し、毎日一つ宛揭示して行つたならば、一箇月の終り、一年の終には立派な統計が出来るであらう。夏の頃、毎朝咲いた朝顔

の花を數へても、價值ある統計が出来る。しかも決して幼兒に無理な要求ではない。以上は靜的な觀察の指導であるが、第三は動的な觀察の方法が來るのである。その理論とする所は、一定の事情の下に一定の事情が生起する場合には、將來に於ても同じ事情の下に同じ事件が生起するであらうと云ふのである。(Causality) その理論より様々の觀察方法が生するのである。「花壇の草花がどうしても枯れる」といふことには、何等か先行の原因がなければならぬ。「信號が下つたから汽車が來る」といふのは、現象の共變を語るものである。或は鷹の嘴と小鳥の嘴と比較して類推させることも立派な觀察である。觀察の指導と稱する以上は、教師が少くともかくの如き態度を持つことが肝要である。

次に觀察の材料とは何を指すのであらう。およそ生活態の生活には必ず環境との交渉がある。

而してその生活態なるものは、高等になればなる程精神的となり、高尚な心の働きを生ずるものである。されば我々には無關係な物理的世界は環境ではないのである。この理より推して幼兒の觀察の材料となるものは、必ず主觀客觀の交渉のあるものを選ばなければならぬ。換言すれば幼兒の興味を持つもの、中より、教師が教育的見地により選擇したものでなければならぬのである。この見方よりすれば、幼兒の興味を惹かないものは先づその觀察の材料となることが出来ないのである。

以上幼稚園の課程について大要述べたのであるが、今幼稚園の仕事を項目的に挙げれば大凡左の通りである。

### 一、社會生活

家庭生活の組織 父と母、兄弟姉妹  
 家族の義務 父の仕事、母の仕事、子供の仕事

家庭と家庭との關係

家政 必要なる家具の種類とその用

家に對する注意 光線、換氣、清潔、整頓等

家畜

商店

官衛、役所、會社

祝祭日の行事

願はしき社會の習慣 協同、親切、正直、眞

實、自立、品位、利己的でなき事

### 二、衛 生

齒、手、髮等の注意

入浴、衣服、食物

### 三、言 語

語彙を増すこと

正しき話方の形式

自由遊戯等を通じて話をさせる事

商標を見ること

#### 四、數へる事

芽を出し初めた種子を數へること

畑から抜き出した野菜を數へること(一例)

#### 五、音 樂

リズム・ダンス、動作遊戯、行進、跳躍

樂器の名稱

四季の歌、祝祭日の歌

鑑賞、蓄音機で遊戯すること等

#### 六、自然研究

附記 本稿は大部分ピケット・ポーレンの「幼児の教育」に據つて書いたものであります。

たゞ觀察の項だけは私の平素考へて居る一端を申上げた次第です。

## 急 告

昨年本誌十月號に掲載した樂曲『冬』は伴奏付きのもので、弘田龍太郎氏作曲、相馬御風氏作歌、東京市小石川區原町十番地東光閣書店出版『うちの燕』中の一曲である。作曲者の注意により同曲は伴奏を以て演奏せられんことを切望する。